

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳とは何か

- 翻訳は日本語だ

翻訳のカギは「語学」力にあるとする考えは、後進国型の翻訳観だ。翻訳の質は訳文の日本語の質でほぼ決まる。

翻訳批評

- 本物と偽物 - リンドバーグ夫人著吉田健一訳『海からの贈物』

吉田健一訳は明快で明晰で明瞭な名訳である。本物の翻訳家が原文をどう読み、どう理解するかを示している。落合恵子訳と比較すると、吉田訳の力がよく分かる。

言葉の裏側

- 情報 - 情報を捨て、書を読もう

変化を扱うのが情報であり、ほんとうに重要なものは変化しない。情報を追っていけば、肝心要の点を見逃す結果になる。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳は日本語だ

中学のころ、豆タンクというあだ名の先生がいた。背が低くて太った先生だが、この先生がサッカーの審判をしていて、授業中にその話をしてくれた。審判は選手よりも走らなければならないので大変なんだという。走っているときにつまずいたらどうするのか。簡単だよ、ころっと一回転してそのまま走ればいいんだとこともなげいう。この話には正直、おどろいた。つまずいたら転んで、額や鼻の頭に擦り傷を作るほど鈍い子供だったからだ。

めったに見ないテレビでワールド杯の試合をほんの少し見ている、数十年前の驚きを思い出した。サッカーをやるには、つまずいたらころっと一回転してそのまま走る芸当ができなければいけないんだ、怪我をするようでは駄目なんだと。運動がまったく苦手は人間はこんなことも考える。

だが、間違ってもそんなことを選手の前でいってはいけない。つまずいても怪我しないようにころっと一回転できるなんてすごいとか、そういう芸当ができないとワールド杯には出られないんですねとかいってはいけない。そんなことは当たり前なのだから。

似たような話が翻訳にもある。翻訳をやっているという、英語ができるんですか、すごいですねという話になることが少なくない。英語で書かれた本が読める、そんなことは当たり前である。読むだけなら、だれでも少し慣れれば読めるようになる。自慢にもならない（翻訳に必要な水準まで読めるようになるのはそう簡単ではないが）。だが、一般の常識は違う。常識ではこう考えられている。

翻訳を考えると時のカギは外国語だ（たいていは英語だ）。翻訳とは外国語で書かれた文章を訳すことだ（あるいは外国語に訳すことだ）。翻訳の善し悪しは外国語をどこまで正確に訳せているかで決まる。翻訳という仕事は外国語を扱う仕事だ（語学の仕事だ）。これらはすべて誤りである。翻訳を理解するためには、何よりもまず、この誤解から自由にならなければならない。

これらの考えがいかに間違っているのかは、翻訳書を読むときにどのようにして読んでいるかを考えてみればよく分かるはずだ。「原書」を横において読んで

いるだろうか。辞書を引き引き読んでいるだろうか。そんなわけがない。読むのは訳書だけに決まっている。翻訳書だけを読む。そこに外国語が絡んでくる余地はない。日本語で読んでいるのだ。「原書講読」の授業のためなど、特別な事情がないかぎり、外国語は関係ない。

もちろん、原著者は外国語で書いている。だが、原著者が書いた内容を日本語で読むのが翻訳書の読み方である。日本語だけで読むのが、翻訳書の通常の読み方である。日本語の質が低ければ、原著者が書いた内容を読み取れるはずがない。それ以前に、読み進める気持ちにすらなれないことも多いはずだ。この点を考えれば、翻訳でもっとも大切なのが日本語の質であることが分かる。

この点を訳者の側からながめるなら、翻訳という仕事は何よりも、日本語での執筆だといえる。原著者が書いた内容を日本語で読者に伝える。これが翻訳という仕事の本質である。外国語の解釈は正確無比だと誇ったとしても、日本語の質が低ければ、原著者が書いた内容が読者に伝わるはずがない。それよりも何よりも、読者が読んでくれるとは思えない。

それでも、と反論したくなるだろうか。外国語で書かれた原文が正確に訳されていないければ翻訳書を読む意味がないではないかと。たしかに訳者にとって、外国語で書かれた原文をしっかりと理解することは、翻訳の質を高めるために必要不可欠な手段である。だが、訳者が原著の内容を伝えるときに使う直接の手段は日本語であって、外国語ではない。直接の手段が日本語、間接の手段のうちのひとつが外国語なのだ。

だから、翻訳でもっとも大切なのは日本語の質である。翻訳の質を見分けるには、何よりもまず日本語の質に注目すべきだ。日本語の質が高ければ、すぐれた翻訳である可能性が高く、日本語の質が低ければ、質の低い翻訳だと考えて間違いはない。翻訳を考えた時のカギは日本語であり、外国語ではない。翻訳は何よりも日本語の仕事であり、外国語の仕事ではない。

だが、日本語の訳文だけで翻訳の質を判断するのは危険ではないだろうか。なめらかで、自然で、流れが良く、美しく、明晰な訳文だが、じつは原著の内容と

かけ離れているという可能性はないのだろうか。たしかに可能性がないわけではない。

だが、読者の立場で翻訳の善し悪しを考える際には、この可能性は無視してもいいといえる。なぜか。その理由は大きくわけて2つある。第1に、原著と比較しなければ翻訳の質がほんとうには判断できないのが事実だとしても、翻訳書を読もうとするときに原著を同時に買って翻訳の質を判断してから読むのは馬鹿げている。買うのは原著か訳書か、どちらか一方だけに決まっている。だから読者の立場からは、訳文の質だけで判断するのが正解である。訳文の日本語の質が低いと判断すれば、訳書を買わないし、読まない。これが正しい態度だといえる。年間に6万点の新刊書がでてくる今の時代には、類書がない本などほとんどないので、訳文の日本語の質が低い翻訳書を読まなければならないとする理由はまずない。学術的な目的で読まなければならない場合はあるだろうが、その場合には訳書を読むのがそもそも間違いである。原著を読むべきだ。原著が英語で書かれている場合にはとくにそういえる。

第2に、よく知られているように、訳文の日本語の質が低いとき、ほとんどの場合、訳者は外国語で書かれた原文をよく理解できていない。訳文を読むだけで、誤訳をかなりの程度まで指摘できる。そして、逆もなりたつ。訳文の日本語の質が高ければ、ほとんどの場合、訳者は外国語で書かれた原文をしっかり理解している。なぜなのか。おそらく、言語能力はひとつだからなのだろう。日本語を書く能力が高い人は、外国語を理解する能力も高い。日本語を書く能力が低い人は、外国語を理解する能力も低い。このため、もちろん例外がないわけではないが、原文と比較せずに日本語の訳文だけで翻訳の質を判断しても、たいていは間違いにはならない。

最後に、翻訳を考えるとときのカギは外国語だとする考えが間違いだと主張する以上、この考えが常識になったのはなぜなのかを考えておくべきだろう。この考えが常識になったのは、外国語がごく一部のエリートだけのものではあったからだと思う。外国語を学ぶのはごく一部のエリートだけであり、まして外国語を使いこなせるようになるのは、そのなかでもとくに優秀な人だけだと考えられていた。幕末から昭和の半ばまでの時期、日本は後進国という立場を自覚して、欧米先進国からすぐれた知識を学ぶことに懸命になってきた。欧米の進んだ知識を学ぶ役割を担ったのが一部のエリートであり、そのための道具が外国語だった。

そして学ぶ手段のひとつが翻訳であった。このような時代背景があって、外国語力が不釣り合いなほど重視されてきたのだと思える。

後進国社会であった当時の日本で、外国語力が貴重だと考えられたのは、もちろん庶民には聞いてもわからない言葉を理解できるからではあるが、それだけではない。日本国内にすら、南は沖縄から北は青森、北海道まで、聞いてもわからない方言がたくさんある。近隣諸国には聞いても分からない言語がさらにたくさんある。外国語力という場合、当時の言葉を使うなら「語学力」という場合、国内の方言や、近隣諸国の言語は対象にはなっていない。対象はあくまでも欧米の言語だ。欧米の言語の場合、母語とは違うというだけではない意味があった。言語が違うだけでなく、書かれている内容、話されている内容が進んでおり、洗練されており、後進国の人間にはとても理解できないものだと思われていたのである。だから、外国語力が不釣り合いなほど重視された。母語ではない言葉でも、慣れればすぐに話せるようになり、読めるようになる。どうやら人間にはそういう能力が備わっている。周囲を見回してみれば、そう考えるのが正しいと思わせる事実がいくらでもあるのに、「語学」という言葉で欧米語の能力が神秘化されていた。

要するに、翻訳を考えるとときのカギは外国語だとする考えは後進国型の考えなのだ。今の日本社会にはふさわしくないと考える。いや、日本は後進国に後戻りしており、日本人の感覚はふたたび後進国型になったというのだろうか。そうかもしれないが、それはまた別の問題である。

好評 翻訳論から知の最前線に迫る！

翻訳とは何か - 職業としての翻訳

山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甞る名著 - 絶妙に英訳された15万用例

NEW 斎藤和英大辞典

斎藤秀三郎著 B5判・1,400頁 本体14,200円

TranRadar 電子辞書 SHOP

<http://www.nichigai.co.jp/translator/>

定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日外アソシエーツ <http://www.nichigai.co.jp/>

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8 03-3763-5241

本物と偽物

- リンドバーグ夫人著吉田健一訳『海からの贈物』

吉田健一訳『海からの贈物』（新潮文庫）は文句なしの名訳である。訳者は吉田茂の長男、生まれたのは1912年というから、漱石の「こころ」の先生が自殺した年、明治から大正に年号が変わった年である。ケンブリッジ大学中退、批評家、随筆家、翻訳家であり、古き日本の典型的な知識人だといえる。『海からの贈物』を読むと、知識人のなかでもっとも上質な人たちがどれほどの力をもっていたのかを実感できる。

知識人の訳だというと、七面倒くさく、難解で、頭が痛くなるような文章なのだろうと思えるかもしれない。吉田健一訳の『海からの贈物』はこういう先入観を見事に裏切ってくれる。明快で、明晰で、明瞭な名文である。原文はきわめて読みやすい文章だが、たぶんたいいていの読者にとって、原文よりさらに読みやすい訳文になっている。

「浜辺」と題された第1章をみてみよう。訳文で2ページと2行の短い章であり、わずか4つの段落で構成されている。第1段落の冒頭はこうだ。

浜辺は本を読んだり、ものを書いたり、考えたりするのにいい場所ではない。私は前からの経験でそのことを知っているはずだった。温か過ぎるし、湿気があり過ぎて、ほんとうに頭を働かせたり、精神の飛躍を試みたりするにはいい心地がよ過ぎる。... (13ページ)

この翻訳がいかに素晴らしいかを伝えるには、ほんとうはそういうことはしたくないのだが、原文を引用するしかない。高校生が十分に読める程度の英語なので、引用しておこう。

The beach is not the place to work; to read, write or think. I should have remembered that from other years. Too warm, too damp, too soft for any real mental discipline or sharp flights of spirit. ...

Ann Morrow Lindbergh, Gift from the Sea, Pantheon Books, p. 15

ここでたとえば、for any real mental discipline が「ほんとうに頭を働かせたり」と訳され、sharp flights of spirit が「精神の飛躍を試みたりするには」と訳されていることに注目したい。試しに mental discipline をどう訳すか、考えてみるといい。たぶん、途方に暮れ

るはずである。

もちろん mental なら知っている。「精神の」「知的」などの訳語がすぐに思い浮かぶ。では、discipline はどうだろう。辞書を引くと「訓練」「規律」「しつけ」などの訳語が並んでいる。では、この2つを組み合わせるとどうなるのか。まさか「精神の訓練」ではあるまい。「知的しつけ」でもない。

このように考えていくと、学校で教えられた訳語や辞書に書かれている訳語が頭のなかで空転するだけで、mental discipline という言葉で原著者が何をいおうとしたのかが、じつはさっぱり分かっていないことに気づくはずだ。訳語なら教えられてきたし、英和辞典にも書いてあるので、何とか分かる。だが、これらの訳語が使えるような文脈だと、もう何も分からなくなるのだ。要するに、訳語が分かっているだけで、肝心の意味が分かっているないのである。

途方に暮れたところで吉田健一訳をもう一度みてみると、なんと「ほんとうに頭を働かせたり」と訳されている。訳者は mental discipline が「頭を働かせること」だといっている。これをみて、もう一度前後を読み直し、辞書を引き直すと、なるほどそういうことだったのかと納得できる。形容詞の mental は要するに「頭」に関係することを示す言葉だし、英和辞典の discipline の項には「専門分野」などの訳語も掲げられている。こうした点を確認すれば、ほんとうの意味で、「分かった」と思えるはずだ。そして、mental discipline というむずかしそうな言葉が、だれにも分かる言葉で訳されていることに感激するはずだ。

この for any real mental discipline がたとえば、「何らかの実質的な精神的専門分野にとって」になっていたとしても、「誤訳」だとはいえない。文句のつけようがない正訳である。だが、これでは読者は何も理解できない。そしてこう訳したとき、じつは訳者も何も理解できていない。何も理解しないまま、難解そうな言葉を操っているだけなのだ。何も理解しないまま言葉を操るのが偽物の知識人、吉田健一のように、しっかりした理解に基づいてだれにも分かる言葉で原文の内容を伝えるのが、本物の知識人である。

本物の知識をもった本物の翻訳家がどのように原著を読んでいるかは、ここに引用した3行足らずの訳文からだけでも、いくつもの点で確認できる。たとえば from other years を「前からの経験で」と訳しているし、too soft を「い心地がよ過ぎる」と訳している。訳文を読んだあとに原文をみると、これ以外にはありえないと思えるほどぴったりの訳だが、原文から訳そうとすると、こういう言葉はまずでてこない。

もちろん、翻訳書を読むときは、原著を並べて読んだりもしないので、以上のような分析は邪道だともいえる。それよりも、吉田健一の訳文だけをじっくりと味わってみるべきだろう。明快で、明晰で、明瞭な名文である。翻訳によくみられる七面倒くさく、難解で、頭が痛くなるような訳文にはなっていない。吉田健一が原著をよくよく消化したうえで、原著者が日本語で書けばこう書くだろうと思える文章を書いていることに気づくはずである。

『海からの贈物』の吉田健一訳と落合恵子訳

吉田健一訳『海からの贈物』（新潮文庫）は文句なしの名訳だが、同じ原著からもうひとつ、落合恵子訳『海からの贈りもの』（立原書房）が1994年に出版されている。吉田健一訳は初版が1967年だから、30年近くのちに新訳がでたわけだ。落合訳をみていくと、吉田訳の素晴らしさが実感できると思える。同じ部分を引用して比較してみよう。

吉田健一訳

浜辺は本を読んだり、ものを書いたり、考えたりするのにいい場所ではない。私は前からの経験でそのことを知っているはずだった。温か過ぎるし、湿気があり過ぎて、ほんとうに頭を働かせたり、精神の飛躍を試みたりするのはいい心地がよ過ぎる。... (13 ページ)

落合恵子訳

海辺は、本を読んだり、ものを書いたり、考えごとをするのに、決して適当な場所ではない。何年にもわたる経験で、わたしはそのことを知っているはずだった。

温かすぎるし、湿気がありすぎる。それに、頭を働かせたり、精神の飛躍を試みたりするには、あまりにも居心地よすぎる場所でもある。(11 ページ)

この4行の訳文を読むだけで、落合訳の特徴がはっきりと分かる。極端にいうなら、吉田健一訳を書き写して、いくつもの変更を加えているだけだとすらいえる。前述の「ほんとうに頭を働かせたり」「精神の飛躍を試みたり」「い心地がよ過ぎる」で、吉田訳をほ

ぼ書き写しているのだ。原文から訳せばこういう訳文にはならないはずなので、落合恵子は翻訳をしていないとすらいえるかもしれない。

だが、既訳があるものの新訳をだすときに、既訳を参照するのは、訳者にとって当然の責務だともいえる。既訳の良い部分を探り入れ、問題がある部分を修正して、既訳よりも良い訳にすることが責務だともいえるのだ。だから、落合訳が吉田訳とそっくりだからといって、とくに非難されるべきではない。

おそらく、落合恵子は吉田訳を書き写すつもりで新訳をはじめたわけではないのだろう。吉田訳とそっくりでは、盗作ではないかと疑われかねないからだ。だが、たとえば、too soft を訳そうとすると、「い心地がよ過ぎる」以外の訳文がありうるとは思えなかったはずだ。前述の any real mental discipline も「ほんとうに頭を働かせたり」以外の訳し方があるとは思えなかったはずだ。吉田訳を参照せず、原文を読んで、辞書を引き、脳の壁の奥深くに収められている語彙を懸命に探るだけの方法で訳せば、こういう訳文になるはずがないことには、気づきもしなかった。吉田訳はそれほど原文に忠実で、それほど日本語として自然な訳なのだ。

もちろん、吉田訳をそのまま引き写すわけにはいかないから、いくつかの点を変更するしかない。ほんとうにすぐれた書き手なら、吉田訳を参考にして、それをさらに超える名訳を作りだせただろう。だが、落合恵子にはそこまでの力がない。いくつかの点で、逆に悪い方向に変更してしまっている。

たとえば、「本を読んだり、ものを書いたり、考えごとをするのに」の部分がそうだ。「たり」という言葉は、こうは使わない。「本を読んだり、ものを書いたり、考えごとをしたりするのに」でなければならぬ。これが正しい使い方だが、うっかりと間違えることは少なくない。親切なワープロ・ソフトだと間違いを指摘してくれるほどである。だから、落合恵子が「たり」の使い方を間違っている、それだけなら、幼稚な文章だというだけの話だ。だが、ここで落合恵子は、正しい使い方をした文章を書き写したうえで、それを間違った方向、幼稚な方向に修正している。少々気の毒になる。

第2の例はもう少し複雑だ。落合訳を読んだとき、なんとも分かりにくい文章だという印象を受けた。よくみると、吉田訳を書き写しただけと思えるほどそっ

くりなのに、印象が違う。吉田訳は明快で、明晰で、明瞭な名文という印象なのに、落合訳は分かりにくく読みにくいという印象なのだ。なぜ、そのような印象を受けるのかを説明していこう。

前述のように、第1章は4つの短い段落にわかれている。これを文章の構成という観点からみると、日本人にはきわめて馴染みの深く、分かりやすいものになっている。吉田訳の各段落の最初の文と第4段落の最後の文をみていくと、構成が簡単に分かる。

第1段落

浜辺は本を読んだり、ものを書いたり、考えたりするのにいい場所ではない。

第2段落

初めのうちは、自分の疲れた体が凡〔すべ〕てで、……何もする気が起こらない。

第3段落

そして二週間目の或〔あ〕る朝、頭が漸〔ようや〕く目覚めて、また働き始める。

第4段落

しかしそれをこっちから探そうとしてはならない…
…我々は海からの贈物を待ちながら、浜辺も同様に空虚になってそこに横たわっていなければならない。

この構成が少なくとも日本人にとってきわめて分かりやすいのは、もちろん偶然にはあるが、日本語の文章構成でよく使われる「起承転結」に近いからである。起で起こし、承で説明し、転で転換し、結で結論を述べる。起承転結の説明によく使われる俗謡を引用しておこう。

起 浪速花町糸屋の娘
承 姉は十八妹は十五
転 諸国大名は弓矢で殺す
結 糸屋の娘は眼で殺す

『海からの贈物』の第1章は、このように、偶然にはあるが起承転結に似た構成になっているので、吉田訳を一読すると、全体がじつによく理解できる。ところが、落合訳では、全体像がみえてこない。何を言おうとしているのかが分かりにくい。個々の言葉は幼稚ではあっても、とくに分かりにくいわけではないのに、全体としては分かりにくく読みにくい文章になっている。それはかなりの部分、原著のパラグラフをいくつもの段落に分割し、逆にパラグラフを超えて段落をつないでいて、起承転結に似た章の構造がみえなくなっているためだ。

落合訳は原著のパラグラフを以下のように切り刻んでいる。

第1パラグラフ 第1段落～第4段落前半
第2パラグラフ 第4段落後半～第6段落
第3パラグラフ 第7段落～第8段落
第4パラグラフ 第9段落～第12段落

第1章はわずか37行だが、これを12の段落に切り刻んだ。平均3行、長いものでも5行しかない。吉田訳は29行、4段落であり、各段落は6行から8行の長さになっている。

落合恵子はたぶん、こう考えたのだろう（あるいは、編集者がそう考えたのかも知れない）。吉田訳との違いをだしたい。たぶん、吉田訳は文が長いいし、段落も長い。文を切り、段落を細かくわかる方法を探ったらどうだろう。いまの読者は昔の読者と違って、段落が短く、文が短いのを好むから……。その結果、なんとも分かりにくい訳文ができた。気の毒なことだ。だれにとって。もちろん読者にとって。

それにしてもなぜ、段落が短い方がいいと考えるのだろうか。おそらく、読者は馬鹿だという思い込みがあるのだ。長い文章は歯が立たない、長い段落には耐えられない、むずかしい言葉があればもう読めない、そういう馬鹿だという思い込みがあるのだ。馬鹿による馬鹿のための馬鹿な本しか売れないという思い込みがある。こういう恐ろしいまでの傲慢さが、出版業界の一部にはびこっている。たぶん、落合訳で段落を切り刻んだのは、そうした一部の風潮から影響を受けたからだろう。

念のために付け加えておくが、落合恵子訳が世の中の翻訳書と比較して、とくに悪いというわけではない。それどころか、名訳だと推奨する人が少なくないほどであり、全体として質の高い訳であることはたしかだ。だが、落合訳がすぐれているのは、吉田訳にかなりの程度まで忠実に従ったからだ。

落合訳をあえて取り上げたのは、吉田健一の訳がいかに素晴らしいかを逆の方向から示しているからである。吉田訳は、新訳を試みてもかなりの程度まで忠実に従うほかにないほどの名訳なのだ。ほかの訳文や訳語が考えられなくなるほど原文に密着していて、しかも自然な日本語になっている。翻訳が明快で、明晰で、明瞭な名文になりうることを示す名訳である。

情報 - 情報を捨て、書を読もう

これからの世の中でカギになるのは「情報」だといわれてきた。世の中は変わった。どう変わったのか。情報化社会になり、情報革命の時代になり、情報技術があらゆる産業の基礎になり、情報力が国や企業や個人の競争力（つまり経済力）を決める時代になるといわれてきた。

つい2年前、情報革命の時代にはすべてが変わるといわれた。インターネットですべてが変わるといわれた。何がどう変わるとういわれたのか。当時の流行語を思い出してみればいい。たとえば、IT、ドッグ・イヤー、先行者利益、勝者総取り、収益過剰、ネットワーク効果、B2CとB2B、中抜き、起業家精神、イノベーション、知的所有権、ビジネス・モデル、株主価値、ストック・オプション、市場原理、競争原理などだ。そして、これらすべてをまとめた「ニュー・エコノミー」という言葉が流行した。過去の経済の常識が通用しない新しい時代が来たというわけだ。

急げ急げ、変化の波に乗り遅れるな、素早く動け、そういわれてきた。そのために大切なのは情報を素早く入手することだともいわれてきた。情報革命で登場した新しい情報機器や情報媒体を使いこなして、逸早く情報を入手する。これが不可欠だといわれた。情報化の波に乗り遅れないように情報化の波に乗る。議論が循環しているようにも思えたが、だからこそ、好循環が生まれて、情報革命がさらに進展するようにも思えた。

あれから2年たって、何かがおかしいことにみな気づくようになった。何かがおかしかったのだろう。虚仮（こけ）にされてきたオールド・エコノミーは意外にしぶといのだ。借りた金は返さなければならない。利益を生まない事業はつぶれる。ニュー・エコノミーの時代には通用しないはずだった大昔からの常識が、何のことはない、生き残っているのだ。バブル期の日本を上回るほど膨らんだ借金の重荷に、情報革命の最先端を担うはずだった業界が押しつぶされようとしている。

情報化社会、情報革命の流れが変わったわけではなく、一時的な行き過ぎを調整しているだけだともいわれている。ほんとうにそうなのか。疑う理由は十分にある。たとえば、1992年ごろの日本でも同じことが

いわれていた。地価と株価は一時的に調整しているだけですぐに上昇軌道に戻ると。

だが、それ以上に基本的な点がある。それは情報疲れだ。情報を追うことには疲れた。情報を追ってれば良いことがあるのなら、疲れても疲れても、どこかで一服して英気を養えばいい。だが、情報を追うことに長けているように思えた人たちが、みな失敗しているように見える。IT事業は赤字を垂れ流し、IT株を買った人たちは大損し、社会を変えるはずだったドット・コム企業も大部分は消えてしまった。コストを数十パーセントも削減するはずだったB2Bの話も聞かなくなった。

情報を素早く入手し、新しい時代への道を逸早く進んで、未開の地の所有権を宣言すれば、莫大な利益が得られるはずだった。だが現実には、先頭を突っ走った人たちは次々に倒れている。周回遅れといわれて馬鹿にされていた人たちは、着実に前進している。

要するに、先行者利益などめったにないことが分かったのだ。変化の波に乗り遅れないように、情報を素早く入手することにいったいどんな意味があるのかと感ぜられるようになったのだ。先行者利益を追求するより、追うものの強みを活かす方がいい。周回遅れを気にする必要などない。チェッカー・フラッグが振られることなどないのだから、人生は続き、社会は続くのだから、ゆっくりと着実に歩いていけばいい。

それに、時代がそう簡単に変わったりはしないことにも気づいた。社会がそう簡単に一変したりはしないことにも気づいた。情報を追っているのは、一時の流行に振り回されるだけになる。一時の流行に乗って一山あてるのが悪いわけではないが、一山あてた後にもっと大きな失敗をして、元の木阿弥になるのが通常だ。流行を追わなくても、人生が終わりになるわけではない。だったら、一時的な流行とほんとうに重要な変化との見分けがつくようになってから、何周もの周回遅れになってから、先行者が疲れて倒れてから、ゆっくりと動きだせばいいのだ。あわてることはない。

情報を追っているのは、疲れるだけになる。これはたぶん、一般に情報と呼ばれているものの性格からくることなのだろう。情報とは変化を伝えるものだ。変化

